

《太陽の塔》を題材にした ESD 教材開発の検討

栗谷正樹

(奈良教育大学大学院 教科教育専攻 社会科教育専修 修了)

中澤静男

(奈良教育大学 教育連携講座)

Consideration of the Teaching materials creation for Education for Sustainable Development
on the theme of “Tower of the Sun”

Masaki KURITANI

(Graduate of School Education, Nara University of Education, completed)

Shizuo NAKAZAWA

(Department of Educational Cooperation, Nara University of Education)

要旨：本稿では、1970 年大阪万博のテーマ展示プロデューサーであった岡本太郎と彼がデザインした《太陽の塔》に着目した ESD 教材の開発と検討を行った。大阪万博が、科学技術の進歩や国力の誇示を競い合う従来路線であったという評価がなされたなかで、岡本太郎は、近代化や科学技術で進歩した「未来は、明るいものであるとは限らない。」と警鐘する展示を展開した。岡本太郎のメッセージが、高度経済成長期の日本で理解されることは難しかったものの、展示で扱われた生命や人々の多様性と尊厳、公害、人種差別などは現在も解決が求められる SDGs の目標に通ずるものである。2025 年大阪・関西万博は、SDGs 達成に向けたこれまでの進捗を確認し、達成に向けた取り組みを加速させる場とされていることから、岡本太郎が《太陽の塔》を含めたテーマ館展示に込めたメッセージを ESD 教材として活用することは有効であると考ええる。

キーワード：太陽の塔 Tower of the Sun

岡本太郎 Taro Okamoto

万国博覧会（万博） World Expo

持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development (ESD)

1. はじめに

2018 年 11 月、博覧会国際事務局（BIE）総会がパリで開かれ、2025 年に大阪にて、1970 年の日本万国博覧会（以下、大阪万博）以来 55 年ぶりとなる日本万国博覧会（以下、大阪・関西万博）の開催が決定した。テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」に決定し、万博を「SDGs 達成に向けたこれまでの進捗状況を確認し、その達成に向けた取組を加速させる絶好の機会⁽¹⁾」、ならびに、「会場全体を未来社会を先取りした超スマート会場とし、新たな技術、サービス及びシステムの社会実装に向けたチャレンジを行う（中略）Society5.0 実現に向けた実証の機会⁽²⁾」として、準備が進められている。

初等教育においては、2020 年度から全面実施されている新学習指導要領⁽³⁾に合わせて小学校社会科副読本も改訂され、『わたしたちの大阪 3 年』（大阪府大阪市）の単元「4 大阪市のうつりかわり⁽⁴⁾」や『わたしたちのまち吹田・大阪：小学校社会科 3・4 年生用副読本』（大阪府吹田市）の小学校 3 年生の単元「4 市のようすのう

つりかわり⁽⁵⁾」にて、1970 年の大阪万博や 2025 年の大阪・関西万博に関連した内容が新たに掲載された⁽⁶⁾。

《太陽の塔》は、1970 年に開催された大阪万博のテーマ展示プロデューサーであった岡本太郎によってデザインされ、シンボルゾーンにテーマ館の一部として、丹下健三デザインの近代的な《大屋根》を突き破る形で建造された。テーマ館は、「過去・現在・未来をつらぬいて流れる根源的なエネルギーと、知恵と、ねがい⁽⁷⁾」を表現した塔の地下展示「過去：根源の世界」から始まり、アメーバから人間に至るまでの生物の進化の歴史を「（中略）根源からふきあがって未来にむかう生命力の象徴⁽⁸⁾」として表現した《生命の樹》を見ながら塔内を登り、腕の出口から繋がった近未来的な《大屋根》に広がる空中展示「未来：進歩の世界」をめぐる後、地上展示「現在：調和の世界」へ降りてくるという 3 層の展示が構成された。個々の展示においては、「未来：進歩の世界」で未来都市などが展示される一方で、公害や人種差別、貧困など文明社会の進歩に伴う矛盾を突いた《矛盾の壁》、核開発や宇宙開発をモチーフに原子雲と月面を対置した《転換の壁》が展示され、岡本太郎は、近代化や科学

技術により進歩した「未来は、明るいものであるとは限らない。⁽⁹⁾」ことを訴えた。また、「現在：調和の世界」では、人種や国籍、肌の色、育った環境が異なる世界中の民衆の生活写真を集めた《世界を支える無名の人々》が展示され、

「(中略)世界を支えているのは、とかくうたわれるような英雄や有名人ばかりの力ではない。むしろ、黙々とさまざまな条件環境の中で闘いながら、ひたすらに自分の生活を生きぬいている人びとである。(中略)この歴史をつくりあげ、いま世界を背負っている、名もない人びとの生活記録を写真によって展示し、人間の生き方の多様さ、その素晴らしさと尊厳をなまなましく浮かびあがらせたい。⁽¹⁰⁾」

という岡本太郎のメッセージが込められている。

大阪万博の統一テーマは「人類の進歩と調和」であった。だが、岡本太郎は、テーマ展示プロデューサーに就任した当初からこのテーマに疑いの目をもっていた。

「一般に進歩というと、未来の方向にばかり目を向ける。科学工業力を誇る。たしかにその面での発達は近年ますますすばらしく、生きた人間が月の上を歩いて、また地球にもどって来られる時代である。歴大な生産力は人々の生活水準を高めた。しかしそれが果して真の生活を充実させ、人間的・精神的な前進を意味しているかどうかということになると、たいへん疑問である。⁽¹¹⁾」

と言葉を残している。

上記の公害や人種差別などを扱った展示内容ならびに生命や人々の多様性と尊厳などの岡本太郎が展示に込めたメッセージは、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の一つである、批判的に考える力⁽¹²⁾と共通点がある。

岡本太郎を扱った授業実践の研究として、隅(2003)がある。小学校6年生を対象にした図画工作科の鑑賞教育の実践として、岡本太郎の作品展の見学を契機に縄文土器から影響を受けた岡本太郎に注目し、岡本作品から影響を受けた自分という設定で児童が岡本作品の連作を作成する実践が紹介されている。また、小学校6年生の社会科と図画工作科の教科横断型の実践として、岡崎ほか(2019)がある。社会科にて、縄文土器についての歴史的学習をした後、図画工作科にて、オリジナルの文様を描いた縄文土器の作成と児童間での作品鑑賞を行う実践が紹介されており、学校教育における縄文土器の美術教育的利点として、岡本太郎の芸術的観点からみた縄文土器の美術的価値が提示されている。このように、小学校社会科、図画工作科にて岡本太郎を扱った実践例は見受けられた。しかし、いずれも岡本太郎や縄文土器を起点に図画工作科にて作品制作や鑑賞を行う実践となっており、ESD教材として《太陽の塔》や岡本太郎を扱った授業実践の研究は、管見する限り見当たらなかった。

さらに、大阪城や通天閣などと共に大阪のシンボルと

して描かれることの多い《太陽の塔》であるが、2018年の修復を機に公開された《生命の樹》などの展示に込められた岡本太郎のメッセージは、多くの人に周知されていないように思われる。

以上の点から、2025年に大阪・関西万博を控え、社会科副読本にも万博の内容が記載された今日において、岡本太郎が《太陽の塔》を含めたテーマ館展示に込めたメッセージに着目したESD教材を開発することに意義があると考えた。

2. 研究の目的と方法

2.1. 研究目的

2017年3月、新たな学習指導要領(2020年度から全面実施)が公示され、前文に「一人一人の児童が、(中略)持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。⁽¹³⁾」という文面が明記された。これにより、持続可能な社会の担い手づくりを通じて、SDGs(持続可能な開発目標)の17目標の達成に貢献する人材の育成を目指した教育であるESD(持続可能な開発のための教育)⁽¹⁴⁾は、これまでユネスコスクールを中心に実践が展開されてきたが、今後は全国の学校でも求められることとなった。

2025年に開催が決定した大阪・関西万博では、SDGs達成に向けたこれまでの進捗を確認し、その達成に向けた取り組みを加速させることが、基本計画に掲載されたことから、万博をESD教材として活用することには大きな意義がある。そこで、本稿では、大阪万博の象徴であった《太陽の塔》に込められた岡本太郎のメッセージを読み解くことから、来るべき大阪・関西万博のESD教材開発の視点を提示することを目的とする。

2.2. 研究方法

本稿では、まず、1970年の大阪万博ならびに《太陽の塔》を含めたテーマ館展示に関して、岡本太郎が残した言葉などを関連させながら解説した平野(2018a・2018b)、《太陽の塔》の意義や色彩・造形表現の意図、モニュメント性など、多角的な視点から考察を行った春原(2001)、大阪で開催された博覧会についてまとめた山名(2014)を中心に、大阪万博と《太陽の塔》を含めたテーマ館展示の構成と内容を整理する。なお、平野(2018a)は、岡本自身が《太陽の塔》の造形の秘密を一切明かしていないため、《太陽の塔》の形が「なにを表しているかは不明であり謎である⁽¹⁵⁾」と、述べている。春原(2001)も平野(2018a)と同様の理由から、《太陽の塔》を作品として解釈するには、「彼の著作や言説から再構成したり、仮説を立てるしかない⁽¹⁶⁾」、と指摘する。本稿では、《太陽の塔》を含めたテーマ館展示を中心に扱うが、上記の指摘に留意する必要があるように思われる。そこで、上記の文献に加え、万博開催時の

パンフレットや広報誌、当時の新聞報道、岡本太郎の著作も参考にしながら、展示内容と岡本太郎が展示に込めたメッセージを整理し、SDGs 及び ESD との関連性を検討する。その上で、2025 年に開催を控える大阪・関西万博において教材開発をするにあたり、SDGs の目標に通ずると考えられる《太陽の塔》と岡本太郎がテーマ館展示に込めたメッセージを題材にした ESD 教材とすることで、SDGs 達成に能動的に参加・協力する子どもの育成を目指した学習を提案する。

3. 1970 年大阪万博について

1970 年の大阪万博の統一テーマは、「人類の進歩と調和」であった。このテーマは、基本理念とともに 1965 年に発足したテーマ委員会にて策定されたものである。

3. 1. 基本理念

基本理念について解説をした日本万国博覧会協会の広報誌『日本万国博 第 1 号』（1966）によると、基本理念では、万博が、「(中略) そのときどきの世界各国国民の創造的活動の成果を集約的に展示してそれぞれの時代の進歩を確認し、新しい発展への強い刺激を提供することによって、人類文明の向上に大きな役割⁽¹⁷⁾」をはたすものであるとしつつも、科学技術の発達に伴う急速な進歩と巨大化の弊害として生まれた矛盾・対立・不平等などの「不調和」の多くは解決されず摩擦と緊張が発生していること⁽¹⁸⁾、そして、「科学と技術さえも、その適用を誤るならば、たちまちにして人類そのものを、破滅にみちびく可能性を持つにいたった⁽¹⁹⁾」ことに言及されている。その上で、「物質文明のみならず、いろんな分野での進歩の『暴走』や、『行きすぎ』をなるべくおさえ、犠牲を最小限にする方向で『進歩』を考える⁽²⁰⁾」ものとして、また、「多様性の相互尊重⁽²¹⁾」という精神を含むものとして「調和」という考え方を紹介し、世界中の多様な人類を尊重しつつ、その人々の多様な知恵や「異なる伝統のあいだの理解と寛容⁽²²⁾」でもって、全人類のよりよい生活に向かって、不調和を乗り越えてゆく⁽²³⁾、「調和的進歩⁽²⁴⁾」が目指すべき姿として描かれた。

3. 2. 統一テーマ「人類の進歩と調和」

平野（2018b）は、統一テーマ「人類の進歩と調和」が決定した経緯について以下のように述べている。

1965 年のテーマ委員会にて、前述の基本理念に沿った統一テーマについて、「人類の調和と進歩」という案が示される。東洋思想的なニュアンスのある「調和」(Harmony) には知恵や平和の概念も入るし、「進歩」には繁栄の意味も含まれるだろうということで、一同が納得した、⁽²⁵⁾ という。ところが、その後、さしたる議論がないまま「調和」と「進歩」の語順が逆転し、いつの間にか「人類の進歩と調和」として話が進み、採択さ

れることとなった⁽²⁶⁾、と平野（2018b）は述べている。語順の逆転により、「不調和」の存在を出発にしていた当初のニュアンスから大きく変わったテーマは、オプティミズムを貫いており、極論するなら「進歩することで調和が手に入る」、「進歩の先に調和がある」といったイメージさえ抱かれかねない⁽²⁷⁾、と平野（2018b）は指摘する。

3. 3. 大阪万博の評価

テーマの「調和」と「進歩」の語順が逆転した結果、大阪万博は、「20 世紀世界に対する危機感を表明する基本理念とはズレてしまった印象⁽²⁸⁾」があり、万博の従来路線を継承することとなった⁽²⁹⁾、と平野（2018b）は主張する。実際、大阪万博にどのような評価がなされたのか。当時の新聞報道を中心に確認をしたい。

基本理念やテーマへの評価を扱った記事が万博開催中の 1970 年 6 月に見られた。以下に一部を引用する。

「経済成長の『落とし子、?』といわれる一兆円万国博覧会。どれくらい人集めによって、経済大国の威信を全 世界に顕示したことは大成功かも知れない。だが、これでは科学技術の進歩を競い合う展示場でしかない。科学技術の進歩がもたらした自然環境の破壊、公害さらには戦争、貧困……といった現在、人類が直面している『不調和』に目をおおっている。『EXPO'70 は現代文明の到達点の指標であると同時に、未来の人類のよりよい生活をひらくための転向点としたい』— こんどの万国博の基本理念であったはずだ。⁽³⁰⁾」
(読売新聞、1970 年 6 月 17 日付)

また、万博が開催された大阪府吹田市の『吹田市史 第 3 巻』（1989）の「第四節 万国博の開催」は、次の言葉で締めくくられている。

「(中略)『人類の進歩と調和』というテーマを掲げながら、実際には万国博が、参加各国の、中でも大同士の国威発揚の舞台になってしまったという印象は拭えない。⁽³¹⁾」。

上記は万博に対しての評価の一部であるが、平野（2018b）が主張するように、大阪万博が近代化や科学技術の進歩を競い合う従来路線と変わらなかったことへの批判、ならびに、基本理念やテーマに示された「不調和」や「調和」の扱いについての批判が、少なくとも当時展開されていたことが分かる。

4. 《太陽の塔》とテーマ館展示

4. 1. 岡本太郎が望んだ大阪万博

1965 年、万博の主務官庁である通産省が作成した設立趣意書には、第一に、欧米地域以外で初、アジアでも初の開催として画期的意義をもつこと、第二に、先進国としての日本を世界に印象づけるという目的が万博開催の意図として明記されている⁽³²⁾。また、万博開催地と

なった千里丘陵が位置する大阪府吹田市の『吹田市史第3巻』（1989）には、当時の誘致に関して

「(中略) 東京オリンピックに向けて、東京を中心とする首都圏へ交通体系の整備などの公共投資が集中的に投下される状況を目のあたりにしては、同様な国家的事業の開催による公共投資の飛躍的増加を、他地域が要求しても当然であろう。こうした背景の中で、万国博は近畿地方へ誘致すべきだという要求が、近畿各府県からあがってきた。⁽³³⁾」

と記載されている。初期の段階において、世界に先進国としての日本をアピールする手段、開催に伴う交通体系をはじめとした地域発展の視点から、行政が誘致活動を展開していたことを読み取ることができる。

一方、岡本太郎は、1967年にテーマ展示プロデューサーに就任する以前の1965年11月3日の朝日新聞に「私の日本文化論『万国博』に望む—岡本太郎」として、論考を投稿している。以下にその一部の要約と引用を記載する。

記事にて、まず、岡本太郎は、近代化によって世界中の同質化が進み、それぞれの文化の独自性とその実体が、強烈な生命力を失っていること⁽³⁴⁾を指摘する。その上で、この普遍主義の傾向を乗り越える手段として、岡本太郎は、各文化固有の運命、特殊性（パティキュラリティー）に賭けるべきだと主張する⁽³⁵⁾。外に対して理解されよう、認められようと、おのれを歪めるようなこれまでの姿勢ではなく、普遍が特殊を包含し、乗り越える近代主義的な手続きとは逆の「特殊」から「一般性」を見かえし、乗り越える姿勢の重要性を訴える⁽³⁶⁾。

そして、出場国ごとに行進するはずであった「(中略) 大勢の選手たちが国籍も性別も肌の色も関係なく、腕や肩を組みながら、一団となって⁽³⁷⁾」会場を行進した1964年の東京オリンピックの閉会式に触れながら、5年後に控えた大阪万博に対して次の言葉を残している。

「ところで、だれでもが印象的に覚えていると思う。東京オリンピックの閉会式に、突如展開した、あの感動的なシーンを。(中略) 突然、自発的にもりあがり、あふれた祭の交歓。あらゆる民族が、その姿のまま、独自の表情で喜びを高めあった。恐らく、世界中の人種の集った広場で、史上初めての感動的儀式だったろう。(中略) 5年後の万国博がどんなものになるか、まだ想像できる段階ではないが、恐らくAA⁽³⁸⁾ 諸国など、財力のない振興の国ぐにが張りきって参加するだろう。してほしいものだ。今まで博覧会といえ、とにかく近代主義の、物量、規模を誇った。しかし日本の広場では、富める国、貧しい国をひっくるめて、それぞれがその独自性をひらききる。あらゆる生き方の質、いろどりを誇らしく輝かせて。そういう猛烈な、総合的世界の祭を期待するのである。⁽³⁹⁾」。

以上から、当初の国や誘致自治体などの行政と、岡本太郎が万博に望んだものには齟齬があるように思われる。岡本太郎は自身の文化論を土台に、アジア・アフリ

カ諸国の人々が、会場で肩身がせまい思いをするような⁽⁴⁰⁾、近代主義の物量や規模、富や科学工業を誇った従来の万博を望まなかった。あらゆる民族が入り混じり、その姿のまま、独自の表情で喜びを高めあった東京オリンピックの閉会式のように、世界中の人種が集い、あらゆる生き方の質、いろどりを誇らしく輝かせる祭りを万博に期待していたことを窺うことができる。

4.2. 《太陽の塔》とテーマ館展示

テーマ展示プロデューサーであった岡本太郎によってデザインされた《太陽の塔》は、テーマ館の一部として、丹下健三デザインの近未来的な《大屋根》を突き破る形で建造された。地下：過去、地上：現在、空中：未来の3層で構成され、人類の根源、調和と進歩が表現された。展示に関して山路（2014）は、「全体を貫いている主題は、人類の過去と未来を支える人間生命の根源を問うという壮大な精神である。⁽⁴¹⁾」と述べている。また、テーマ展示プロデューサーであった岡本太郎は、

「科学の力を媒体とし、進歩への期待を前提とした万国博は、すでに役割を終えたように思われる。そこで、われわれはむしろ、象徴的、風刺的に、人類の進みゆく道、運命を示唆するようなものをつくりたい。⁽⁴²⁾」

と言葉を残している。ここでは、1970年当時、現地で販売された『テーマ館ガイド』（以下、ガイドブック）、平野（2018a・2018b）を中心に各展示内容と展示に込められた岡本太郎のメッセージを整理する。

ガイドブックでは、まず、巨大で複雑な現在の文明とその技術力が、「自然の大部分を征服して宇宙空間にまで進出した⁽⁴³⁾」ことに触れる。その一方で、岡本太郎は、今日の高い知能をもった現世人類が繰り広げる＜人類の時代＞の背後に、過去何十億年にわたる＜生命進化＞の歴史と、人類最初の祖先が、地球上に生まれてから何百万年にもわたり自然の中にその独自の道を一步一步きりひらいてきた＜先史人類＞の歴史が存在すること、そして、現世人類が今日の高度な文明を築くまでの間に、地球上のあらゆる地域であらゆる自然環境の変化に応じて様々な知恵と工夫を発揮しながら築き上げてきた、多彩で多様な＜文化＞の歴史があること⁽⁴⁴⁾を指摘する。その上で岡本太郎は、多彩で多様な文化の中に、常にいきいきと息づいているものは、「よりゆたかで、よりしあわせで、より充実した生活を求める生物にも人類にも共通したねがいである。⁽⁴⁵⁾」と主張する。また、その底には何十億年にわたる地球の歴史を通じて、驚くほど多様な＜いきもの＞を生み出しながら、なお未来に向かって生き続けようとする、あつくはげしい＜いのち＞の流れが感じとられる⁽⁴⁶⁾、と岡本太郎は述べる。

「私たちの明日も、いのちの歴史の根源をつらぬいて流れるこのエネルギーをうけつぎつつ、それを生物・人類に共通するねがいに調和させるべく、かぎりなくゆた

かな知恵を発揮しながらきづかれて行くであろう。⁽⁴⁷⁾」という岡本太郎のメッセージをもとに、地下展示「過去：根源の世界」では、過去・現在・未来をつらぬいて流れる根源的なエネルギーと、知恵と、願いが表現された展示構成となっている。「(中略) 人間は根源的なものを見失ってはいけぬ。⁽⁴⁸⁾」と訴えた岡本太郎は、生物の根源である DNA や、スクリーンに人間や昆虫などの様々な生物の誕生シーンを映すことで生命の連帯感を象徴した《生命のうた》、狩猟・呪術を展開しながら自然と共生していた先史人類の姿、そして、近代文明によって失われつつある世界中の仮面や偶像、道具を展示した。

続く、塔内に伸びる《生命の樹》では、生物の進化の過程と多様性、尊厳を提示する。

「(中略) どんな高等な生物でも、またアメーバのような単細胞のまま活動しているものでも、生命の尊厳にみちている。生命の不可思議、その美しさ。まことに生命は環境・条件に応じてさまざまに変貌しながら、脈々として受けつがれのびてゆく 大地に深く根をはり、天空に向って限りなく枝をひろげる大樹のように。⁽⁴⁹⁾」

という岡本太郎の言葉の通り、高さ 41 m の色鮮やかな樹にアメーバなどの原生生物から人類誕生までの代表的な生物の模型が展示され、進化を続けてきた生物の偉大な生命力のドラマと、地下の生命の根源から生命が未来に向かい止まることなく伸び続けてゆく様子が表現された⁽⁵⁰⁾。

塔内を登った先の右腕から繋がる近代的な《大屋根》で展開された空中展示「未来：進歩の世界」では、「進化のはてに登場した人類が、未来に向かって進む第一歩は、宇宙への道である。⁽⁵¹⁾」として、商業通信衛星の実物大模型や未来都市などが展示された一方で、「未来への転換点に立つ人類が抱える問題を取り上げた⁽⁵²⁾」展示が展開される。核開発や宇宙開発をモチーフに、原爆の原子雲と月面が対置された《転換の壁》は、「人間がついに太陽と月をとらえ、神わざに近い物力を持ったこと感じさせる⁽⁵³⁾」ものとなっており、赤青 2 色の壁が対抗する《矛盾の壁》では、赤い壁には、核戦争の恐怖を、青い壁には、貧困や公害、人種差別などの社会的矛盾が写真やコラージュで展示された⁽⁵⁴⁾。科学技術や近代化による進歩の弊害によって「未来は、明るいものであるとは限らない。⁽⁵⁵⁾」という岡本太郎のメッセージが込められている。2 つの壁の先には、192 面の正三角形のスクリーンに囲まれた空間《マンダラマ》が広がる。スクリーンには、世界中の様々な民族の生活と自然、風俗が映し出され、「多様さの中に生み出される調和の世界⁽⁵⁶⁾」が表現された。

空中展示を周回した後、戻ってきた地上展示「現在：調和の世界」には《調和の広場》が広がる。なお、広場に関して、「人種・国籍・眼の色・肌の色・環境もちがう人間たちが群れつどう⁽⁵⁷⁾」ことは、「人類の調和を感動的にあらわす<祭>の最大のよろこびである⁽⁵⁸⁾」と

岡本太郎は述べている。ここには、619 枚の国籍や人種、文化の異なる民衆の生活写真が広がる《世界を支える無名の人々》が展示された。《世界を支える無名の人々》の『公式ガイドブック』に、岡本太郎は、民衆の生活写真を展示した理由や目的について、

「(中略) 世界を支えているのは、とかくうたわれるような英雄や有名人ばかりの力ではない。むしろ、黙々とさまざまな条件環境の中で闘いながら、ひたすらに自分の生活を生きぬいている人びとである。(中略) この隣人たち、ひろい地球の上にちらばり、風土、慣習、さまざまな条件の差はあっても、運命にしたがって一貫した人間的生活をしている。この歴史をつくりあげ、いま世界を背負っている、名もない人びとの生活記録を写真によって展示し、人間の生き方の多様さ、その素晴らしさと尊厳をなまなましく浮かびあがらせたい。⁽⁵⁹⁾」

と述べている。貧しい人、豊かな人、着ているものも違うし、住み方も働いている所も違う、笑い方も、怒り方も、泣き方も様々であるが、みな同じ人間であり、あらゆる条件をこえて人間は本質的に同じである⁽⁶⁰⁾、とガイドブックで述べた岡本太郎は、「目の前に見るイメージによって親近感を深め、あらためて多様さの中にある人類の調和を再認識する絶好の場となるであろう。⁽⁶¹⁾」と言葉を残している。

以上が各展示の構成と岡本太郎が展示に込めたメッセージである。「過去：根源の世界」にて、人類の根源や生命の尊厳と多様性を振り返り、「未来：進歩の世界」で近代化や科学技術による弊害を危惧し、「現在：調和の世界」にて、人種や国籍の異なる人々の多様性と尊厳を提示した。岡本太郎が展示に込めたメッセージは、世界中の人間を尊重し、知恵をもって「不調和」を乗り越える「調和的進歩」を目指した基本理念に近いものであるように思われる。

4.3. 岡本太郎のメッセージは民衆に理解されたのか

山路 (2014) は、テーマ館展示に関して次のように述べている。1968 年のテーマ委員会にて、

「過去にも現在にも矛盾があるが、やはり博覧会であるので、未来をあまりに悲観的にじゅそ⁽⁶²⁾的に描くことはできないので、慎重にやりたい。⁽⁶³⁾」

と発言した岡本太郎であったが、テーマ館の空中展示では、原爆や貧困、公害、人種差別などを扱った《矛盾の壁》や《転換の壁》などが展示された。しかし、テーマ館内部に占める割合で言えば、「そうした『不幸』や『矛盾』の展示は控えめだ」という印象を与えている。いや目立たなかったと言った方がよい。⁽⁶⁴⁾と山路 (2014) は指摘する。

平野 (2018a) は、「未来は、明るいものであるとは限らない。」と考えた岡本太郎の空中展示「未来：進歩の世界」は、楽観的な進歩主義に支配された万博において、未来観そのものが他のパビリオンとは決定的に異な

る、異端の未来だった⁽⁶⁵⁾、と述べている。また、『世界を支える無名の人々』についても、

「ほんとうに世界をつくっているのは英雄なんかじゃない。無名の民衆（ピープル）だ。万博の主役は科学技術などではなく、民衆であり人間であるべきだ⁽⁶⁶⁾」

という岡本太郎のメッセージは、万博において異色のものであった⁽⁶⁷⁾、と述べている。その一方で、平野は、テーマ館展示に込められた岡本太郎のメッセージについて、「（中略）当時の観客たちにそれが伝わったとは思いません。『夢の未来』を無邪気に信じていた高度成長の時代には、とても無理だったろうと思います⁽⁶⁸⁾」と、述べている。赤坂（2010）も、平野と同様に《太陽の塔》は成功したが、同時代に理解されたわけではなかった⁽⁶⁹⁾、と指摘している。

展示構成の割合、高度経済成長期であった当時の日本情勢など、さまざまな要因の結果、岡本太郎が《太陽の塔》を含めたテーマ館展示に込めたメッセージが当時の民衆によって理解されることは、難しかったように思われる。

5. 教材化の検討

岡本太郎が《太陽の塔》の展示に込めたメッセージが、高度経済成長期の日本において理解されることが難しかったことは前述の通りである。しかし、『矛盾の壁』で警鐘した貧困や差別などの近代化や科学技術に伴う弊害は、大阪万博から50年が経過した現在においても解決が求められている地球的諸課題であり、SDGsの目標「1 貧困をなくそう」や「10 人や国の不平等をなくそう」に該当する。また、テーマ「人類の進歩と調和」を疑い、高度経済成長期における科学技術の発展や近代化に伴う弊害を問題視し、「未来は、明るいものであるとは限らない。」と訴えた岡本太郎の視点は、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の一つである、批判的に考える力に該当する。そこで、SDGsの17目標、ならびにESDとの関連性について整理し、教材化の検討を行う。

5.1. SDGs・ESDとの関連性

地下展示「過去：根源の世界」では、岡本太郎が、自然と共生しながら様々な知恵と工夫を発揮して築いた先人の多彩な文化の中に見出した、「よりゆたかで、よりしあわせで、より充実した生活を求める生物にも人類にも共通したねがい」に着目する。「よりゆたかで、よりしあわせで、より充実した生活」を人間だけでなく、生物も含めた共通の願いとした岡本太郎の視点は、SDGsの目標「11 住み続けられるまちづくりを」や「14 海の豊かさを守ろう」、「15 陸の豊かさを守ろう」が該当する。

空中展示「未来：進歩の世界」では、科学技術や近代

化に伴う弊害を問題視し、「未来は、明るいものであるとは限らない。」と訴えた。岡本太郎が《矛盾の壁》や《転換の壁》で扱った貧困は、「1 貧困をなくそう」や「3 すべての人に健康と福祉を」、「6 安全な水とトイレを世界中に」が、公害は、「11 住み続けられるまちづくりを」や「12 つくる責任、つかう責任」が、人種差別は、「5 ジェンダー平等を実現しよう」や「10 人や国の不平等をなくそう」が、原爆（核兵器）は「16 平和と公正をすべての人に」が該当する。

そして、空中展示「未来：進歩の世界」の《マンダラマ》や地上展示「現在：調和の世界」の《世界を支える無名の人々》は、多文化共生を訴えるものであり、「5 ジェンダー平等を実現しよう」や「10 人や国の不平等をなくそう」、「17 パートナリシップで目標を達成しよう」が該当する。

以上のように《太陽の塔》を含めたテーマ館展示に込められた岡本太郎のメッセージは、SDGsとの関連が多々あり、現代社会においても十分に通用するものであると考える。また、ESDは、SDGsの17目標の達成に貢献する人材の育成を目指した教育であることから、《太陽の塔》の教材化は、上記のSDGsの目標への関心を高め、その達成に向けて能動的に参加・協力する子どもの育成に資するものと考えられる。

高度経済成長期であった日本の民衆に岡本太郎のメッセージは伝わらなかったが、2025年大阪・関西万博を迎えるにあたり、《太陽の塔》に込められたメッセージを重ね合わせることは十分に意義深いものであると考え、教材化を提案したい。

5.2. 教材について

岡本太郎が1970年大阪万博のテーマ館展示で問題視した貧困や差別などの科学技術の発展や近代化に伴う弊害は、約50年が経過した現在において、地球的諸課題としてより顕在化している。また、『生命の樹』や『世界を支える無名の人々』で表現された多様性の尊重と尊厳をはじめとした、展示に込められた岡本太郎のメッセージはSDGsに通じるものであり、現在社会においても重要であると考えられる。

そこで、《太陽の塔》を含めた1970年の大阪万博のテーマ館展示についての学習を起点に、岡本太郎の批判的思考やSDGsに通ずる展示に込められたメッセージなどを踏まえた多角的な視点から現在の社会を見つめ直した上で、子どもたちが伝えたい内容を2025年大阪・関西万博の展示案として表現する実践を提案する。大阪のシンボルである《太陽の塔》を起点にしたこの教材を、SDGsや地球的諸課題への関心を高め、今後、子どもたちがSDGsの目標達成に向けて能動的に参加・協力するための契機にしたいと考えた。

なお、大阪で2度目の開催となる2025年大阪・関西万博は、SDGs達成に向けたこれまでの進捗を確認し、

その達成に向けた取り組みを加速させる場とされている。大阪で開催される新旧2つの万博を通して、SDGsに関連した学習が展開できるという点においても、《太陽の塔》と岡本太郎が展示に込めたメッセージを題材として扱う意味があると考えた。以下に、実践案の概要を記載する。

5.3. 実践の概要

(1) 単元名

「太郎さんの眼で見てみよう～2025年大阪・関西万博のテーマ展示を考える～」

(2) 対象

小学校6年生総合的な学習の時間

(3) 単元の目標

- ・《太陽の塔》を含めたテーマ館展示と岡本太郎のメッセージから、科学技術の進歩の弊害として差別などが生じていること、大阪万博から50年ほどが経過した現在においてもこれらがSDGsの目標として解決が求められていること、岡本太郎が展示に込めた生命や人々の多様性の尊重と尊厳のメッセージを理解する。

【知識・技能】

- ・岡本太郎が展示に込めたメッセージやSDGsの17目標を踏まえ、2025年大阪・関西万博で伝えたいメッセージやそれを踏まえた展示内容を考え、表現する。

【思考・判断・表現】

- ・岡本太郎が《太陽の塔》の展示に込めたメッセージの考察や、2025年大阪・関西万博の展示に向けての調べ学習や展示内容の検討を意欲的に取り組む。

【主体的に学習に取り組む態度】

し	テーマ館の一部であった《太陽の塔》の展示写真を参考に、岡本太郎が伝えたかったメッセージを考える。(1)	・宇宙開発を展示したアメリカ館とテーマ館の地下展示や《生命の樹》など、写真を比較対象として提示する。
ふ	展示について考えたことを発表し合った上で、岡本太郎が展示に込めたメッセージを共有し、SDGsの17目標との関連性についても確認する。(3)	・《太陽の塔》と塔内の《生命の樹》の見学や大阪万博当時の塔内展示を再現した動画の活用など、岡本太郎が展示に込めたメッセージを体感する機会を設定する。
ひろ	2025年開催予定の大阪・関西万博で伝えたいメッセージを考える。(3) ・大阪・関西万博が、SDGs達成やsociety5.0の実現を目指した万博であること、空飛ぶタクシーやIPS細胞関連の展示も計画されていることについても触れる。 大阪・関西万博の基本計画に掲載のテーマ事業案のうち「生命の塔」をヒントに、塔の展示内容を考える。(4)	・岡本太郎のメッセージやSDGsも踏まえながら、現在の社会において展示で扱いたい内容を考え、調べることができるよう、資料を用意する。 ・塔の展示内容や展示に込めるメッセージをイラストや文章で表現させる。

表1 (4) 単元展開の概要 12時間 (筆者作成)

	学習活動 (時間)	学習への支援
みつめる	1970年に開催された大阪万博の概要をつかむ。(1) ・総来客数は6421万人で大成功だったこと ・アメリカ館の「月の石」が大人気であったこと ・電気自動車やワイヤレステレホン、缶コーヒーなど、最新技術が披露されたこと ・《太陽の塔》が大阪万博の象徴であり、多くのグッズが販売されたこと などを紹介する。	・当時の様子が分かる写真や映像を活用する。 ・現在のスマートフォンや電気自動車などに繋がる、日常生活で身近な事例を用いる。
	《太陽の塔》の中には何があったのだろう。	

6. まとめ

本稿では、2025年に大阪・関西万博が控えていることに関連し、1970年大阪万博のテーマ展示プロデューサーである岡本太郎と彼がデザインした《太陽の塔》に着目したESD教材開発の検討を行った。1970年大阪万博と《太陽の塔》を含めたテーマ館展示について整理する中で、科学技術の進歩や国力の誇示を競い合う従来路線の万博であったという評価がなされた一方で、岡本太郎は、近代化や科学技術で進歩した「未来は、明るいものであるとは限らない。」と警鐘する展示を展開していたことが分かった。岡本太郎がテーマ館展示に込めたメッセージが、高度経済成長期の日本において理解されることは難しかったものの、《生命の樹》で扱った生命の尊厳と多様性や《矛盾の壁》での公害や人種差別、《世界を支える無名の人々》での多様な人々の尊厳などは、現在も解決が求められているSDGsの目標に通ずるものであることが明らかとなった。

来るべき 2025 年大阪・関西万博に対して、ESD の教材開発を行うにあたり、推進が進む SDGs や顕在化している地球的諸課題への関心を高め、行動化を促す目的を視点に、ESD 教材の開発をすべきであると考え。大阪・関西万博は、SDGs 達成に向けたこれまでの進捗を確認し、その達成に向けた取り組みを加速させる場とされていることから、岡本太郎が《太陽の塔》を含めたテーマ館展示に込めたメッセージを SDGs と関連させながら、ESD 教材として活用することは有効であるだろう。

注

- 1) 公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会, 「2025 年日本国際博覧会 (略称『大阪・関西万博』) 基本計画」, p. 9 <https://www.expo2025.or.jp/wp/wp-content/themes/expo2025orjp/assets/pdf/masterplan/expo2025_masterplan.pdf> (2021 年 11 月 26 日閲覧)
- 2) 同上, p.9 (2021 年 11 月 26 日閲覧)
- 3) 政府広報オンラインホームページ, 「2020 年度、子供の学びが進化します! 新しい学習指導要領、スタート!」 <<https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201903/2.html>> (2021 年 11 月 26 日閲覧)
- 4) 堀公明ほか編 (2020), 「わたしたちの大阪 3 年」, 日本文教出版, pp.90-113
- 5) 吹田市小学校社会科副読本編集委員会編 (2020), 「わたしたちのまち吹田・大阪: 小学校社会科 3・4 年生用副読本」, 吹田市教育委員会, pp.74-97
- 6) 2025 年開催予定の大阪・関西万博に関する内容の記載は、『わたしたちの大阪 3 年』(大阪府大阪市)のみで見られた。
- 7) 日本万国博覧会協会 (1970), 「日本万国博覧会テーマ館ガイド (改訂版)」, p.5
- 8) 同上, p.13
- 9) 同上, p.17
- 10) 日本万国博覧会協会 (1970), 「世界を支える無名の人びと」, p.13
- 11) 岡本太郎 (2000), 『岡本太郎の本 5 宇宙を翔ぶ眼』, みすず書房, p.211
- 12) 文部科学省ホームページ, 持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development) <<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>> (2021 年 11 月 26 日閲覧)
- 13) 文部科学省 (2017), 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)」, p.15
- 14) 文部科学省ホームページ, 持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development) <<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>> (2021 年 11 月 26 日閲覧)
- 15) 平野暁臣編著 (2018a), 「太陽の塔」, 小学館クリエイティブ, p.110
- 16) 春原史寛 (2001), 「岡本太郎《太陽の塔》の研究」, 藝叢: 筑波大学芸術学研究誌, 第 18 巻, p.55
- 17) 日本万国博覧会協会 (1966), 『日本万国博 vol. 1』, p. 8
- 18) 同上, p.16
- 19) 同上, p.16
- 20) 同上, p.17
- 21) 同上, p.18
- 22) 同上, p.17
- 23) 平野暁臣編著 (2018b), 「岡本太郎と太陽の塔 増補新版」, 小学館クリエイティブ, p.121
- 24) 日本万国博覧会協会 (1966), 『日本万国博 vol. 1』, p.17
- 25) 平野暁臣編著 (2018b), 「岡本太郎と太陽の塔 増補新版」, 小学館クリエイティブ, p.121
- 26) 同上, p.121
- 27) 同上, p.121
- 28) 同上, p.121
- 29) 同上, p.121
- 30) 「『進歩と調和、一応は評価: 平和の必要、痛感』『核』『公害』になぜふれぬ」, 読売新聞, 1970 年 6 月 17 日, 朝刊, p.9
- 31) 吹田市史編さん委員会編 (1989), 『吹田市史 第 3 巻』, p.523
- 32) 山路勝彦 (2014), 「大阪、賑わいの日々: 二つの万国博覧会の解剖学」, 関西学院大学出版会, pp.172-173
- 33) 吹田市史編さん委員会編 (1989), 『吹田市史 第 3 巻』, p.520
- 34) 「私の日本文化論『万国博』に望む一岡本太郎」, 朝日新聞, 1965 年 11 月 3 日, 夕刊, p.7
- 35) 同上, p.7
- 36) 同上, p.7
- 37) 後に「平和の行進」と呼ばれ、以降のオリンピックの開会式にて定着した。
NHK スペシャル取材班 (2020), 「幻のオリンピック: 戦争とアスリートの知られざる闘い」, 小学館, pp.6-7
- 38) Asian-African. アジアとアフリカ。
山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之編 (2020), 「新明解国語辞典 第八版」, 三省堂, p.151
- 39) 「私の日本文化論『万国博』に望む一岡本太郎」, 朝日新聞, 1965 年 11 月 3 日, 夕刊, p.7
- 40) 岡本太郎 (1968), 「岡本太郎・万国博のヴィジョン」,

- 『藝術新潮』, '68 6 月号, 新潮社, p.12
- 41) 山路勝彦 (2014), 「大阪、賑わいの日々：二つの万国博覧会の解剖学」, 関西学院大学出版会, p.257
- 42) 日本万国博覧会協会 (1968), 『日本万国博 vol. 7』, p.26
- 43) 日本万国博覧会協会 (1970), 「日本万国博覧会テーマ館ガイド (改訂版)」, p.5
- 44) 同上, p.5
- 45) 同上, p.5
- 46) 同上, p.5
- 47) 同上, p.5
- 48) 岡本太郎・針生一郎 (1968), 「万博の思想」, 『デザイン批評』, 季刊第 6 号, 風土社, p.137
- 49) 日本万国博覧会協会 (1970), 「日本万国博覧会テーマ館ガイド (改訂版)」, p.13
- 50) 同上, pp.14-15
- 51) 同上, p.18
- 52) 平野暁臣編著 (2018a), 「太陽の塔」, 小学館クリエイティブ, p.74
- 53) 日本万国博覧会協会 (1970), 「日本万国博覧会テーマ館ガイド (改訂版)」, p.22
- 54) 川崎市岡本太郎美術館編 (2000), 「太陽の塔からのメッセージ：岡本太郎・EXPO'70」, p.61
- 55) 日本万国博覧会協会 (1970), 「日本万国博覧会テーマ館ガイド (改訂版)」, p.17
- 56) 同上, p.17
- 57) 同上, p.27
- 58) 同上, p.27
- 59) 日本万国博覧会協会 (1970), 「世界を支える無名の人びと」, p.13
- 60) 同上, p.13
- 61) 同上, p.13
- 62) ある特定の人や物事を激しく憎み、神仏に祈願してそれを害しようとする。呪詛・呪咀。
小学館国語辞典編集部編 (2006), 「精選版 日本国語大辞典 第二巻」, 小学館, p.521
- 63) 日本万国博覧会協会, 「日本万国博覧会公式記録資料集別冊 D - 1 専門委員会会議録 1 テーマ委員会会議録」, p.197
- 64) 山路勝彦 (2014), 「大阪、賑わいの日々：二つの万国博覧会の解剖学」, 関西学院大学出版会, p.231
- 65) 平野暁臣編著 (2018a), 「太陽の塔」, 小学館クリエイティブ, p.74
- 66) 同上, p.89

- 67) 同上, p.89
- 68) NHK ホームページ, 解説委員室「『太陽の塔のメッセージ (視点・論点)』 2018 年 5 月 28 日 岡本太郎記念館 館長 平野 暁臣」
<<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/297853.html>>
(2021 年 11 月 26 日閲覧)
- 69) 赤坂憲雄 (2010), 「岡本太郎という思想」, 講談社, p.67

参考文献

- 赤坂憲雄 (2010), 「岡本太郎という思想」 講談社
- 赤坂憲雄 (2020), 「岡本太郎の見た日本」, 岩波書店
- 岡崎典子・田畑直彦・上原一明 (2019), 「初等教育における縄文土器の学習と土器づくりの実践」, 山
口大学教育実践総合センター研究紀要, 47 巻,
pp.91-100
- 岡本太郎 (1979), 「岡本太郎著作集 第 1 巻 今日の芸術」,
講談社
- 岡本太郎 (1980), 「岡本太郎著作集 第 2 巻 黒い太陽」,
講談社
- 岡本太郎 (1979), 「岡本太郎著作集 第 4 巻 日本の伝統」,
講談社
- 岡本太郎 (2017), 「自分の中に毒を持って (新装版)」,
青春出版社
- 吹田市小学校社会科副読本編集委員会編 (2020), 「わ
たしたちのまち吹田・大阪：小学校社会科 3・4 年
生用副読本」, 吹田市教育委員会
- 隅敦 (2003), 「美術館での作品鑑賞を表現に生かす授
業実践に関する考察：岡本太郎の連作をつくる実践
を通して」, 山口大学教育実践総合センター研究紀
要, 15 巻, pp.71-79
- 平野暁臣編著 (2018a), 「太陽の塔」, 小学館クリエイ
ティブ
- 平野暁臣編著 (2018b), 「岡本太郎と太陽の塔 増補新
版」, 小学館クリエイティブ
- 堀公明ほか編 (2020), 「わたしたちの大阪 3 年」, 日本
文教出版
- 山路勝彦 (2014), 「大阪、賑わいの日々：二つの万国
博覧会の解剖学」, 関西学院大学出版会
- 安森大樹 (2019), 「岡本太郎の芸術思想・作品に関す
る先行研究とその問題点」, 崇城大学芸術学部研究
紀要, 第 12 号, pp.27-48

